

まずは、この写真をご覧ください。



大正4年(1915)の6月28日に生徒控場(のちに雨天体操場)の改築が竣工しました。この工事のために3月2日にその裏手になる土堤の土取作業が新勝寺の職人によって行われました。「学校日誌」によれば、同年の9月4日に生徒控場側のレンガ土堤の壁が崩れたのですが、それが今の本校西門からのびている、通称「野郎坂」のレンガ壁です。奥の方に見える、明治42年(1909)に設置された東門と、植樹された桜の古木とともに、本校の歴史をしのぶことができるものです。



今の講堂前あたりから見た終戦直後の校舎全景。左端に見える建物が生徒控場兼雨天体操場。



この改築されたばかりの生徒控場に、「学然後知不足」という額が掲げられました。「学^(まな)びて然^(し)か^(る)後^(のち)に足^(た)らざるを知^(し)る」と読みます。「乙卯夏」とあることから、この年の夏に書かれたものだとわかります。これは高等女学校の講堂に掲げられた「求則得之 舍則失之」とセットになっています。これは「求^(もと)むれば則^(すなわ)ち之^(これ)を得^(え)、舍^(す)つれば則^(すなわ)ち之^(これ)を失^(う)しな^(う)」と読みます。さて、この書は誰の手によるものでしょうか。





高等女学校講堂。
奥に額が見える。

なんと、あの、犬養毅なんです。

犬養毅は明治 23 年（1890）の第 1 回衆議院議員選挙で当選して以来、政党政治家として活躍し続け、大正 2 年（1913）と、同 13 年（1924）の 2 度にわたる護憲運動の中心となりました。昭和 6 年（1931）には立憲政友会総裁として内閣総理大臣になりましたが、翌年の五・一五事件で暗殺されました。日本の憲政史上の偉人として、国民に広く親しまれている人物です。

犬養毅は安政 2 年（1855）、備中（今の岡山県）に生まれました。生家は名字帯刀を許された大庄屋で、そのルーツをたどると、吉備国の鬼ノ城のに住む温羅（うら）という鬼を征伐した吉備津彦命の家来、犬飼健命（いぬかいたけるのみこと）（他にささもりひこ、とめたまおみがあります）です。どこかで、聞いたことのあるお話ですね。そうです。あの桃太郎伝説のモチーフになったといわれています。岡山県の吉備津神社に行くと、犬養毅の手による社号の石柱があります。

犬養毅は明治 9 年（1876）に上京し、慶応義塾に入りますが、同時に二松学舎で漢学を学びます。二松学舎は若き日の夏目漱石も学んだことのある、明治時代以来の漢学の名門です。犬養毅の漢学の知識はここで大きく成長しました。その後、大隈重信が結成した立憲改進黨に入党し、第 1 回帝国議会開会に先立って行われた第 1 回衆議院議員総選挙に当選し、以後 42 年間で 18 回連続当選します。これは、「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄に次ぐ記録です。

明治 31 年（1898）に第 1 次大隈重信内閣の文部大臣だった尾崎行雄の後任として、わずかな間でしたが初入閣しました。大正 2 年（1913）の第 1 次護憲運動では尾崎行雄とともに第 3 次桂太郎内閣の打倒に奔走し、大正 13 年（1924）の第 2 次護憲運動では革新倶楽部を率いて加藤高明の護憲三派内閣に参加しました。

一方で、犬養は大アジア主義（民族を超えたアジアの連帯を説く思想）の立場から、中国の辛亥革命を支援し、日本に亡命した孫文や蒋介石をかくまったりしました。

その後、犬養は自らが所属する革新倶楽部を立憲政友会に吸収させて政界を引退します。しかし、昭和3年（1928）の普通選挙制による最初の総選挙が告示されると、犬養を慕う地元選挙区の支持者が、本人に内緒で立候補を届け出てしまいました。そのことを知った犬養は「本当に今回は最後だよ」と言って立憲政友会から出馬して選挙戦を戦います。その結果、当選。ところが、その政友会では、亡くなったばかりの田中義一総裁の後継を巡って派閥争いが起こりました。そこで、党の分裂を避けるために、もはや生ける伝説と化していた無難な犬養を、後継総裁として担ぐことになったのです。

さらに、時の第2次若槻礼次郎内閣は、昭和6年（1931）に起こった満州事変に対処できずに総辞職。そこで、野党第1党の政友会が内閣を組織することとなり、犬養内閣が成立したのです。この時、犬養はかぞえ年で77歳。間違いなく、本人も予想していなかった展開でしたでしょう。しかし、犬養という人物は、一見して淡々としていますが、ひとたび自分の出番となれば強い決意を持って行動しました。犬養は大蔵大臣に高橋是清を迎え、当時不況にあえいでいた日本経済を景気回復させました。また、満州国の問題も、中国の指導者蒋介石と太いパイプをもつ犬養によって、解決への道が模索されていきました。そんな時の五・一五事件だったのです。この事件によって、「憲政の常道」と呼ばれた第2次護憲運動以来の政党内閣制が崩壊したことから、日本の近代史にとって大きな曲がり角となりました。

なぜそんなすごい人物の書が本校に贈られたのでしょうか。私は、柏原文太郎という人物がかかわっているのではないかと推測しています。柏原文太郎は明治2年（1869）に今の本校近くの成田市寺台に生まれ、東京専門学校（今の早稲田大学）を卒業後、アジアの民族運動にかかわり、清朝末期の変法運動に失敗して日本に亡命した康有為・梁啓超を支援したり、フランスの植民地であったベトナムの独立運動家で、日本に亡命中であった潘是漢（「佩球」ともいい、ファン・ボイ・チャウのこと）の活動を助けました。変法運動は康有為を中心に日清戦争敗北後の清国で始まった、日本の明治維新にならった根本的な制度改革を求めた運動で、西太后とむすんだ保守派によって失敗しました。

潘是漢は帰国後に人材育成のために日本留学を進める「東遊運動」を展開しました。どちらも世界史の教科書に出ている有名な出来事です。

柏原は犬養と共に孫文を支援、大正元年（1912）の第11回衆議院議員総選挙において犬養の立憲国民党から立候補して当選し、大正年間に政界で活躍しました。ちょうどそんな頃にこの書が贈られたのです。ちなみに、成田英漢義塾時代に当時東京専門学校講師であった柏原に対して職員として迎える交渉をしていましたので、本校とは全く縁がないわけではありません。

さて、改めてこの2つの書を見てみましょう。「学然後知不足」は儒学の四書五経のうち『礼記（らいき）』の「学記（がっき）」から、「求則得之 舍則失之」は『孟子（もうし）』の「尽心章句上（じんしんしょうくじょう）」から選ばれた文です。漢学に精通している犬養が、たくさんある言葉からなぜこれを選んだのでしょうか。犬養の人となりを考えてみると、彼自身がこれまでの人生をふりかえり、未来ある若者たちに贈るメッセージにふさわしいものとして、入念にこの言葉を選んだはずだと思います。そう考えると、この文の解釈は通り一辺倒なものではなく、犬養の心の内を想像しながらのものでないといけないのではないかと、思いました。そこで次のような解釈を考えてみました。

しっかりと学べば、自分のやるべきことが見えてくるものだよ。

自分から積極的に学ぼうとすれば、自然に答えは得られるが、今必要ないからといって放っておけば、得られるはずの答えは逃げていってしまうよ。

どちらもかなりの意識になってしまい、国語の先生に怒られてしまいそうですが、五・一五事件で海軍の青年将校にピストルで撃たれた後、「今撃った男を連れてこい。よく話して聞かせるから。」(有名な「話せばわかる」のもととなったエピソードです)と言ったように、犬養毅という人は、たとえ自分に危害を加えた者であろうとも、未来ある若者に対しては温かい目線で見ているように思います。きっと生徒たちを励ますために、この文を選んだのだと思います。

やがて、戦後になりましてから、昭和32年(1957)に雨天体操場と同じ場所に建てられた旧図書館に受け継がれました。その後、倉庫に保管されたままでしたが、本校の創立百周年を機に装丁し直されました。考えてみますと、この書は大切なものとはいえ、暗い場所にひっそりと保管しておくよりも、誰もが目にすることができる学びの場に掲げることこそ、最もふさわしいと思います。これからもずっと大切に保管していかなければならないものですので、光や湿度の管理が行き届いた場所が本当はいいのですが、きっと犬養もこの書も、生徒の皆さんの目に付く場所に掲げられることを望んでいるはずです。そこで、校舎の新築に際して、ラーニングセンターに掲げてもらえるようお願いしました。ですから、ラーニングセンターでこの書を見たら、次の言葉を思い出してください。

日本歴史の偉人が、そして100年の長きにわたる時間が、君たちを見下ろしている。励め。励め。

今回はここまでとします。

(深田富佐夫)